

# 世間解

第四二九号

令和五(二〇二三)年十一月

発行 西法寺

## 念仏もうさるべし

― 撰取不捨 その一 ―

十一月になりました。皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

今年もあと二ヶ月です。『仏説観無量寿経』というお経さまに、

一々の光明は、あまねく十方世界を照らし、念仏の衆生を撰取して捨てたまはず。

というお言葉があります。撰取不捨という阿弥陀さまの救いのおはたらきを顕す有名なお言葉です。それをうけて中国の善導大師さまが、

ただ念仏の衆生を観そなはして、撰取して捨てざるがゆゑに、

阿弥陀と名づく

とおっしゃってくださいます。「念仏の衆生を必ず救いきってくださいます。撰取不捨というおはたらきを持ってくださっているのです、阿弥陀さまと申しあげるのでよ」とお教えをくださるのであります。

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし

撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる

これは、それをうけられた親鸞聖人のご和讃です。

撰取不捨。撰め取って捨てることがない。ありがたいお言葉であります。さて、この撰取不捨についてこんなお話が伝わっています。

徳大寺の唯蓮坊、撰取不捨のことわりをしりたきと、雲居寺の阿弥陀に祈誓ありければ、夢想に、阿弥陀のいまの人の袖をとらへたまふに、げけれどもしかとらへてはなしたまはず。撰取といふは、にぐるものをとらへておきたまふやうなることと、ここにて思ひつきたり。

唯蓮坊という方が「撰取不捨」の意味を知りたいと思って雲居寺という京都の東山にあったお寺の阿弥陀さま（お座りになっている大仏さまであったそうです）の前でお勤めをしておられた。そんなとき夢に、お座りになっている阿弥陀さまが立ちあがり進んでこられて唯蓮坊の袖をつかまれました。唯蓮は驚いて阿弥陀さまの手を振り払って逃げようとしたけれども、阿弥陀さまは決してお離しになることはなかった。撰取というのはこういうことなのだ。唯蓮は思っていた…。というお話であります。蓮如上人はよくこのお話をなさっていたそうです。この物語はよく知られたものであったようで、ほかに同じ話が伝わっています。

そこでは“夢に阿弥陀さまが唯蓮の手をとって撰取とはこういうことだとおっしゃった”という表現になっています。このときの唯蓮坊は“逃げる”ことをしません。撰取不捨のことを知りたいと祈誓した唯蓮の願いに応えて阿弥陀さまが手を取ってください「これが撰取不捨ということだよ」とおっしゃったというのであります。蓮如上人がよくおっしゃったという時の唯蓮は同じように祈誓をしながら、いざ阿弥陀さまがお出ましくださった時に驚いて逃げているのであります。

逃げない唯蓮坊の話もご存じであったはずですが、蓮如さまは“逃げる唯蓮坊”のお話をされるのであります。阿弥陀さまに阿弥陀さまのお救いのおはたらきをお教えくださいと願いをかけて、阿弥陀さまがそれを知らせようと立ちあがって自分の前まで来られて自分の衣の袖をしっかりとつかまえてくださいました。願いがかなっているはずなのに“逃げる”のであります。私は、阿弥陀さまにお救いのはたらきを教えてくださいとお願いも起こしたこともなければ、それを知ろうともしませんでした。そんな私を“逃げ続けている私”を阿弥陀さまは、ずーっと追いかけて追いかけてつかまえてくださったのであります。だから私は今念仏に遇っているのですね。